

1. 詩人略歴

1957年生まれ。モスクワ教育大学物理学科卒業。モスクワ在住。1980年代、独立キリスト教雑誌「ヴィボル」の編集責任者を勤める。1982年、「コンチネント」に詩が掲載されて以来、サミズダート誌、タミズダート誌で作品を発表。「チャスイ」「ミーチン・ジュルナール」「エプシロン・サロン」などのサミズダート誌から作品を集めた画期的な文集「インデックス」(1990)やドミトリー・プリゴフの編纂による文集「月曜日(7人のサミズダート詩人)」(1990)に作品が収録された。1995年、レオニード・チシコフのイラストによる24編の詩画集『偉人たち』がチシコフのダブルス社より出版(500部)され、その名を広く知られるようになる。2000年度のアンドレイ・ベールイ賞の詩部門でショートリストに入る。1980～90年代の作品を収めた『寄せ集めおよび本の余白への書き込み』(2001)が新文学評論のアンドレイ・ベールイ賞シリーズの一冊として出版された¹。

2. 作品に関する若干の考察

サブギールはスホーチンとチムール・キビーロフの二人をコンセプチュアリズムの詩人ではなく、ソツ・アートの詩人というカテゴリーに入れている。またエプシテインは同じ二人をポスト・コンセプチュアリズムの代表的詩人としている。詩人を「流派」に腑分けすることにどれだけの意味があるのかはさておき、プリゴフ編纂による文集「月曜日(7人のサミズダート詩人)」(1990)にその作品が収録されていることから明らかなように、スホーチンがコンセプチュアリズムの潮流の中で育った詩人であることは間違いない。

ここではヤネチェクの指摘するように、スホーチンを種々様々な文学ソースを自由自在に引用する「寄せ集めの巨匠」と呼ぶことにしたい。実際その詩は一読して必ず「どこかで読んだことのある詩だな」と思わせる。具体的に何をどう引用しているのかも指摘できる。ところがその引用があまりにも多いために、何度も読んでいるうちにどこからどこまでが引用で、どこからどこまでがオリジナルなのかがまったく分からなくなる。引用とオリジナルの境界があいまいになり、幻惑されていく過程を楽しむための詩のようでもある。

スホーチンの第1詩集『偉人たち(英雄たちの物語)』(1995)はチシコフの個性的なイラストでさらに幻惑の度合いを高めている。内容はその表題通り、ロシア建国の祖ワリヤ

¹ このシリーズからはすでに、セルゲイ・ストラタノフスキイ(1944-)、ミハイル・アイゼンベルク(1949-)、エレナ・ファナイローヴァ(1962-)、アレクサンドラ・ペトロローヴァ(1964-)、イーゴリ・ヴィシネヴェツキイ(1964-)、グリゴリー・ダシェフスキイ(1964-)、ヤロスラフ・モグーチン(1974-)、ニコライ・コノノーフ(1958-)の詩集が出版されている。

ーグから始まり、植物育種家ミチューリン、極地探検家パーニン、宇宙飛行士ガガーリン、パルチザンの少女コスモデミヤンスカヤ、炭鉱労働者スタハーノフ、そしてチャパーエフ等、ロシア・ソビエトの偉人たち49名の物語が、一編につき六行八連の詩型でうたわれている。ソビエト時代に「幸福な少年時代」を送った世代にはたまらなく懐かしい偉人たちの物語は「ソビエト民話」ともいうべきもので、民衆の意識の中にすでに深く食い込んでいる物語群である。例えば、物理学者アレクサンドル・ポポーフ(1859-1905)は「改良型アンテナをつけた検波器(コヒーラー)」の物語の主人公である。無線機やラジオを「発明したのはマルコーニではなく、ポポーフだった」。野原で居眠りをしていたポポーフは天上からの声を聞き、ラジオの発明者となることを予言され、やがて礼拝の讚美歌が響きながら終わる。荘厳な幻視の描写は大袈裟なまでに生真面目である。天才が聞く天上の声というおなじみの詩的モチーフ、ポポーフにまつわる電気物語の数々からの引用で出来ている作品である。ウラジスラフ・クラコーフは「ミハイル・スホーチンの『偉人たち』における言葉の口承文学」(『新文学評論』21号、1995)で次のように述べている。「スホーチンは実際に新しい口承文学をつくることに成功した。しかしそれはソビエト民話の『偉人たち』について語っているのではない。スホーチンは言葉についての口承文学、現代の言葉としてのフォークロアについての口承文学を創造したのだ。スホーチンの本の主人公は幻の「偉人」ではなく、唯一の言葉であり、社会・文化的記号からなるポストモダン的世界の唯一にして完全なるリアリティーとしての言葉である。これらの記号を内部から爆発させ、社会・文化的媒体に自由に再コード化させ、スホーチンはこの媒体の本質的特性に従い、それと個人の意識との相関関係の原理的メカニズムを明るみに出し、そしてその意識を具象化し、表現することのできる芸術言語を発見し、創造するのだ。この言語は純粹に人工的な構成物であり、シュミラクルであり、高度な文体技術を使用した実験室での実験の結果なのである。」(『事実としての詩』(1999)に再録)

スホーチンの引用方法はまさに「寄せ集め」、先行する詩作品のごった煮の感がある。しかし、これは単なるパロディーではない。詩は常に「寄せ集め」にならざるをえないのだ。スホーチン自身は自覚している。現代の電子メールを例に考えてみよう。送信した電子メールに対する返信が届く。前回出したメールの内容がそのまま「>」というマークと共に引用されていて、それに対する返事が書いてある。その返事に対する返事をまた書くことになるのだが、これが何度も繰り返されると「>」がどんどん増えていき、いったいどこからが本文でどこまでが返事なのか分からなくなってしまう。こうしてオリジナルと引用の区別がいとたやすくあいまいになっていく経験をした方は多いだろう。

すべての詩はすでに書かれており、詩人はそれらを再構成して、新たな詩を書くにすぎないという考え方はドミトリー・プリゴフが最初に言い出した訳ではない。それは今世紀初頭のアクメイズム、とりわけマンデリシュタームに顕著な詩的意識だった。そして、スホーチンもまたマンデリシュタームについて度々言及し、「トリスチア」という詩さえかいているほどだ。また、詩「いまだ誰もかく語らず」ではマンデリシュターム、ヴヴェジェンスキイ、ハルムス、サトゥノフスキイが登場し、彼らの言葉とスホーチンの記憶が融合し、あいまいになっていく。マンデリシュターム同様に詩は「つくられる以前に」すでに響いているのだという感覚は次の詩にも明らかである。

そして読書…
何の読書だ？
それはもう始まっている
そう、たぶん、あなたが気づくより
もっと前から。

第2詩集『寄せ集めおよび本の余白への書き込み』も実に様々な作品からの引用で成り立っている。特にタルムードや『西遊記』の原文を中心にレイアウトし、その余白に書き込まれた詩が秀逸である。すでに書かれてしまったテキスト、読者としてそれを読むという行為、その痕跡としての書き込み…。こうした手法についてスホーチン自身は詩集の巻頭論文で次のように述べている。

「これらの詩の大部分（純粹に量的だが）は引用やパラフレーズではなく、完全に作者の言葉で出来ている。引喩が私にとって興味深いのは、それが詩的言語をつくりえるという範囲においてのみである。それは単に「すでに語られた」ものに基づいている（表現手段に基づいているのと同じように、それはテキストの視覚的構造にしばしば基づいている）。芸術におけるすべての「古きもの」と「新しきもの」とのあやふやさや相対性の意識こそマンデリシュタムにおいてとりわけ鮮明に語られている。

何もかも昔にあったこと　すべてはまた繰り返される
そしてぼくらには認識の瞬間だけが甘美だ

（「トリスチア」）

しかしこれは結末の認識ではない。「古きもの＝新しきもの」の幻想性は「オリジナル＝非オリジナル」を否定しない。本質的なものと本質でないものがあり、それは非本質的でさえあるが、おそらくどんなところであれ、ここにその境界があることはまるで疑いがない。（中略）

従って詩的言語は引喩に基づきながら、作者と読者、書かれたものの間の関係をけっして無効にすることはない。それはおそらく彼らにとってなじみのものと、それゆえに擦り減ってしまうアクセントとをいくらか極端に混合しているだけなのだ。しかも話し言葉ではなく書き言葉のために、とてもひたむきに混合している。

「寄せ集め」は新しいジャンルというわけではない。

これは本の余白への書き込み、つまり、単に読み終えたものについて書くことであり、それらと相関することなのだ。そしてこの本が編集されてから数年後の今日、私のもとに電子メールが届き、私はこのジャンルのもっと正しい名称を見出すのだ。それは「Re」（返信）と名づけられていることだろう。」

テキストを読むという行為と詩を書くという行為は表裏一体のもののようなものである。我々は読みながら、すでに書いている。我々の言説も思考もすべてが引用の集積と解体、再構築によるものである。すべては引用であると同時にオリジナルとなる世界では自己のアイデンティティーさえがいとやすくあいまいになる。しかし、詩の言葉、テキストそのものはアイデンティティーを必要としない。それはすでに空気のようなものになって大気に融け込んでおり、それを呼吸する詩人の息とともに再生された詩の言葉が空中に放出される。たまたま本の余白に書き込まれた文字がテキストとなって記録に残るのである。

ミハイル・スホーチン作品リスト

СУХОТИН Михаил Александрович (1957—)

詩集

Великаны (героические рассказы). — М.: ДАБЛУС, 1995. Илл. Л.Тишкова. В папке 24 листа с рассказами + титульный лист.
Центоны и маргиналии. — М.: НЛО, 2001. 152 с.

雑誌掲載作品

Континент, № 31 (1982), с.171-175.
Поиски, № 4 (1982), с.145-151. Стихи разных лет.
Континент, № 37 (1983), с.34-41.
Эпсилон-салон, № 1 (XII.1985). Героические страницы.
Эпсилон-салон, № 6 (X.1986). Страницы-центоны.
Эпсилон-салон, № 7 (XII.1986). Страницы на всякий случай.
Эпсилон-салон, № 10 (IV.1987). Желтая птичка.
Эпсилон-салон, № 15 (VII.1988).
Митин журнал, № 11 (1986). Страницы на всякий случай.
Черновик, № 2 (осень 1989).
Гуманитарный фонд, № 2 (35), 1990. С.4.
«Родник» (Рига), № 7, 1990, с.20-23.
«Пастор». Страницы на всякий случай.
Воум!. № 2 (3), 1992, с.13-18.
Роза Яакова // НЛО, № 8 (1994), с.307-316.
Гибель Помпеи // НЛО, № 16 (1995), с.200. Визуальное стихотворение.
Цирк «Олимп», № 8 (3'96), с.13.
Шалалула // «Знамя», № 10, 1998.
Страницы на всякий случай // НЛО, № 36 (2/1999), с.300-307.
«Улов», вып.1, 2000, с.231-246. Стихи о первой чеченской кампании
О двух склонностях написанных слов (о конкретной поэзии) // НЛО, № 16 (1995),
с.244-248 (в сокращении: «Иностранная литература», №1, 1994).
Два Дон Жуана // TextOnly, # 7, январь 2001. Статья. А.К.Толстой и Д.Хармс.

文集等収録作品

Индекс. — М.: Эфа, 1990. с.100-108. Страницы-центоты : друг мой милый :
страница 26.
Понедельник. Семь поэтов самиздата. /Сост. Д.А.Пригов. — М.: Прометей, 1990.
с.71-91. Ничего особенного.
Самиздат века. /Сост. А.И.Стреляный, Г.В.Сапгир, В.С.Бахтин, Н.Г.Ордынский. —
Минск-М.: Полифакт, 1997. с.651-652.

Genius loci : Современная поэзия Москвы и Петербурга. — М.: Издательство Руслана Элинина, 1999. с.69-74.

Цирк «Олимп»: Избранное. — В литературном альманахе «Майские чтения» (Тольятти), № 2 (2000), с.37-39. Стихи.

Crossing Centuries; The New Generation in Russian Poetry. Eds. by John High et al. Talisman House Publishers, Jersey City, New Jersey. 2000. pp.65-67.

Время «Ч»: Стихи о Чечне и не только. — М.: НЛО, 2001. с.109-111, 314-336.

Web サイト

У Александра Левина.

<http://levin.rinet.ru/FRIENDS/SUHOTIN/index.html>

У Сергея Летова. Все есть у Левина.

<http://www.screen.ru/letov/rus/Suhotin.htm>

参考文献

Владислав Кулаков. Свое и чужое в поэме М.Сухотина «Роза Яакова» // НЛО, № 8 (1994), с.302-306;

Там же. // Поэзия как факт: Статьи о стихах. — М.: НЛО, 1999, с.172-179.

Владислав Кулаков. Эпос языка в «Великанах» Михаила Сухотина // НЛО, № 21 (1995), с.444-447;

Там же. // Поэзия как факт: Статьи о стихах. — М.: НЛО, 1999, с.180-188.

Всеволод Некрасов. Послесловие (О Михаиле Сухотине). // Центоны и маргиналии. — М.: НЛО, 2001. с.141-146.

Там же. <http://levin.rinet.ru/FRIENDS/SUHOTIN/about.html#1>

Илья Кукулин. История слов как гений несуществующего места // Русский журнал. <http://www.russ.ru/pegas/98-08-05.htm>

Михайл Эпштейн. Каталог новых поэзий. // *Moderne russische Poesie seit 1966, Eine Anthologie*, Herausgegeben von Walter Thumler. Berlin: Oberbaum Verlag. 1990, с. 359-367.

鈴木正美「余白への書き込みが詩になる時……——ミハイル・スホーチン」ユリイカ 2002年6月号、246-247頁。

* このリストは「非公式詩」のサイト (PBB: Неофициальная поэзия)

<http://www.rvb.ru/np/publication/02comm/41/01suhotin.htm> を参照し、適宜データを修正・追加したものである。

スホーチン詩抄

※『偉人たち（英雄たちの物語）』（1995）より

ポポーフによって発明されたラジオ

可変電磁式の
改良型アンテナをつけた検波器を
野に走り回るネズミたちから
発明したのはマルコーニではなく、ポポーフだった
そこでは田舎のアコーディオンの中
なにも怪しい音など聞こえようもなかった。

英雄は湿った大地の上にしばしば横たわった
草や火打ち石に悲しみをゆだね
われらが未来の学者は悲嘆にくれた
たまたま大地に耳を近づけて
疲弊したわが祖国の声を
繊細な聴覚で捕らえることを習得した。

数センチの音域で
あるとき彼はあの世のものではあるが
しかし聞き覚えのある甘く歌うような声を聞く。
彼は子守歌にあやされるように寝入ってしまう
すると夢の中で突然理解するのだ
自分のため世界のためのこんな知らせを

「おまえが小さく ひどく不格好なものたいたことではない
未来の偉大なる発明家よ、
おまえは朝には違う外貌となって目覚めるのだ：
高くそびえる頸の上に据えられている
三つの頭の記憶をおまえに与えよう、
野獣の足と鳥の翼を与えよう。

おまけに精密回路と無線送信機を
さらにおまえに残していこう
おまえの声が音の粒子となって伝わるように
太洋をコマイとなって滑るように
満ちあふれる度胸と勇気が
雌ウズラとなって空を飛ぶように

ポポーヴィチはガバと飛び起きた
輝きと全一性に驚嘆した
六つの目で周囲を見回すと
彼は自分の肩の力強さに驚いた
すると全世界に次のような言葉が
さまざまな声となって響き渡るのであった：

司祭たちと天使たちは静かに礼拝を執り行う
それら目に見えぬ合唱は至るところ飛び交う、
殉教者たちはたたえられ、聖人たちは
庇護と御力の中で栄光に輝く、
まさしく彼らによって癒され
礼拝の恩恵に美しく飾られるのだ。

盲人の目を開かせよ みなしごを受け入れよ、
墓の中の親たちの平安を祈れ、
路上に恵みを施せ
病める者の傷を癒せ
神への旅立ちにより永遠に
皆の一人一人が平安になるであろう。」

※ 初期の詩より

いまだ誰もかく語らず

マンデリシュタームは言った

…キャラバン小屋…

ああ、忘れた。

こいつはつまり僕が忘れたんだ、

しかし、僕が忘れたんだとマンデリシュタームが言ったのではない。

アレクサンドル・イワーノヴィチとダニイル・イワーノヴィチは
証言した

…イワン・イワーヌィチ…

ああ、忘れた。

イワン・イワーヌィチとダニイル・イワーノヴィチのどっちだったか、
それともアレクサンドル・イワーヌィチ

たぶん誰かがそっと教えてくれたのか？

ヤン・アブラムイチがいかに関じたことか？

…私がしたいのは…

すなわち彼、

すなわち私、

すなわち彼、

すなわち、いいや、また忘れた。

しかし私は確かに知っている——その名を私は正確に選んだ：

「いまだ誰もかく語らず」

われわれは

もっともグローバルなものではない

もっとも主要なものではない

もっとも宿命的なものではない

もっとも巨大なものではない

もっとも画期的なものではない

もっとも壮大なものではない

もっとも各もつともではない

もっとももつとももつともではない

もつともだ。

成功の芸術は

芸術の成功の中

レーニン記念レーニン勲章レニングラード地下鉄

それが今なんと呼ばれているのか——超レーニン化され、再々レーニン化されて？

注釈付きの詩
各々の言葉に
松葉杖をついて、ほおーら。

指はペンに伸びた
ペンは——紙へ
紙は——平面へ
改良された冷たさへ
転移された重力の中心と
光学機器の照準器をもった
改良されたものへ

一瞬にして
詩は自由に流れ始める

ここに存在するのはぼくだけではない、
しかし、僕の不在という事実。
僕たち 読者たちの間にあるのは いわば
多少とも関心のもてることが
ないということが
ありえないということだ